

■ 編集だより

編集後記

1995年1月にあった阪神・淡路大震災の直後、関西地区では寸断された交通機関の復旧やインフラの回復に追われ、多くのボランティアが日本全国から集まって生活支援を行っていた時期がある。その時期にノルウェーの精神科医が来日して阪神地区に住む同国人に対するこころのケアを行ったことという話を聞いた。阪神地区にはノルウェー学校があり、同国人が多いという背景もあるが、遠く離れた日本で生活する自国民の生活の場で起きた大災害に心を砕き、具体策の一つとしてこころのケアを行う中でノルウェー人にとっての母国語（ノルウェー語）で震災の恐れ体験を語る事ができて心が救われた思いがあったとのことである。その後自身に自身が北欧への留学をする機会が与えられ、オスロ近郊の入院施設で患者さんとその家族がともに施設内にある家で生活をしてカウンセラーや精神科医がその生活の様子を観察して治療的な介入を行うという場を見学する機会が与えられた。そのように北欧諸国では社会福祉の充実により心病める方への手厚い支援が可能であったという側面があるものの、世界各地で起きた大地震により甚大な人的・物的被害が出たという報道の中での在留邦人のような方々のこころの健康被害がどうなっているのか考えつつ、我々にとって参考になる部分があるのではと考えた。

日本人で留学を志す若手が減じているという話がある。これも留学中の小さな経験であるが、アフリカ出身の研究者仲間がアフリカでの精神科医療の必要性について「アフリカは貧しいので気分が落ち込んでいる余裕はない。そこでみんな明るくするようにしている。」というような話を聞いたり、日本語のできるスウェーデン人が日本人から受ける相談では身の周りの人間関係の悩みが圧倒的に多いと言っていたことを思い出し、いずれも個人的な意見ではあるが広い意味での文化の違いも感じられた。現在の所属の大学では6年生の臨床実習の中で約半数が1カ月（ないし2カ月）の海外医療実習を行い、海外実習に参加する学生の過半数がアフリカをはじめとする発展途上国に行っている。それらの国での先端的な医療を学ぶことを期待しているのではなく、「多くの子供たちが命を失っていること」「世界では切実に医療を必要としている人々がいること」を学生自身の眼と耳で見聞してもらうことが大きな目的になっている。そのような実習に向かう学生に対しては心のケアの状況も見て来てほしいと伝えるようにしている。

世界では様々な価値観と多様性のなかで医療や健康の状況があり、その中でこころの健康の問題への取り組みの状況も国によって地域によって多様性がある。精神神経学雑誌ではPsychiatry and Clinical Neurosciences (PCN) 誌で掲載された論文を紹介するようになった。PCN 誌の一つ一つの論文に目を通せなくても、本誌に掲載される日本語の抄録や精神医学のフロンティアで紹介される優れた論文の紹介に目を通していただくことで、(多少大袈裟にはなるが)世界にも眼を向ける機会であればと願われる。学会誌としての大きな役割は会員諸氏の間での意見・情報の交換であるが、更に日本からの情報の発信とともに世界各国から情報を受け取る相互交流の場としてPCN 誌を始め本学会誌が役割を担うことが日本の精神医学にとっても大切なことではないかと考えている。

谷井久志